

鼓童と様々な世界的アーティストとの交流

鼓童の公演は、日本はもとより世界各地で行われる「ワン・アース・ツアー（「一つの地球」をテーマに行われる鼓童のメイン公演）」だけではなく、小・中学校、高校などで行われる「交流学校公演」、浅草公会堂での「浅草公演」、その他、ワールドミュージックやクラシック、ジャズ、ロック、ダンス、古典芸能など異なるジャンルのアーティストとコラボレーションを行っています。近年では初音ミク、MIYAVIとの共演やオープンワールドRPG『原神』のサウンドトラックに参加したことも話題になりました。

また、世界の主要な国際芸術祭、映画音楽等へも多数参加。佐渡島における鼓童の創造活動や理念、ライフスタイルは、世界のアーティストや芸術関係者から注目を受け、影響を与えています。

意外!? なコラボプロジェクト

『輝夜姫』...作曲家・石井真木氏の音楽に振付家イリ・キリアン氏の舞踊が融合したバレエ作品。日本、カナダ、パリ・オペラ座 ガルニエ宮、パリ・オペラ座 バスティューなどで上演

『KODO TOGETHER』...イギリス Pitch & Sync と鼓童が共同でキュレーションを行ったデジタルアルバム（2021年）

読売巨人軍の応援ソング「The Anthem」作曲...ジャイアンツ主催試合で使用（2020年より）

「電子担ぎ太鼓」... 大手電子楽器メーカーのローランドと世界初の電子太鼓の共同開発

世界のアーティストを佐渡に迎えて開催するアース・セレブレーション

鼓童が国内外で出会ったアーティストや文化人を佐渡に招き、豊かな自然の中で多様な文化を交錯させ、新しい地球文化を創造しようと1988年から毎年夏に佐渡市とともに開催している国際芸術祭が「アース・セレブレーション」です。舞台の他、ワークショップやマーケット、様々な企画展示、体験ツアー、フリッジなどが開催されます。第1回目のゲストはエルビン・ジョーンズ氏、山下洋輔氏、中国鼓楽芸術団、ドラマーズ・オブ・ブルンジなど。そのほか黒田征太郎氏と中上健次氏の対談などが行われました。

これまでにゲストとして鼓童とコラボレーションした方々：渡辺香津美、梅津和時、バカボン鈴木、上妻宏光、MIYAVI、金徳洙サムルノリ（韓国）、スアール・アグン（インドネシア）、ドゥドゥ・ニジャエ・ローズ・パーカッション・オーケストラ（セネガル）、フーン・フル・トゥ（ロシア、トゥバ） etc.



次世代プレイヤーを育む鼓童文化財団研修所

鼓童の舞台に立つには、秋、冬に行われる実地面接の選考を経て、鼓童研修所に入るのが必須。ここで2年間の研修を行い、さらにメンバー全員の前で演奏する最終選考の結果、鼓童への入団が決まります。入所すると、まず自分用の竹箆を作ることからスタート。その後、角材にカンナをかけて太鼓のバチを製作。舞台メンバーになっても自分でバチを作ります。カリキュラムも佐渡島をはじめ日本各地の伝統芸能から唄、能楽、茶道、陶芸、農業など様々。そして研修所は太鼓の技術だけでなく、鼓童の舞台人として必要な様々なことを学ぶ場でもあるのです。



太鼓を通じた教育・社会活動

舞台以外でも、演奏やワークショップを交えた交流学校公演など様々な文化振興を行っています。社会活動では、例えば高齢者の健康増進・介護予防のためのプログラム「エクサドン」。「エクササイズ（運動）」+「佐渡」+「ドン（太鼓の音）」を合わせた造語で、鼓童文化財団と佐渡にある汐彩クリニック 森本芳典院長により開発されました。また、ワークショップの場を進行、促進する役割を担うファシリテーターも養成しています。



京都芸術大学と姉妹校の東北芸術工芸大学の卒業生も、鼓童で活躍しています。（現在在籍しているのは、代表の船橋裕一郎、スタッフの住吉麻梨子、上田恵里花、本間諒子）

KODŌ

鼓童 太鼓芸能集団 大解剖

発行：京都芸術大学 舞台芸術研究センター



今日の太鼓演奏グループの先駆的存在である鼓童は、新潟県の佐渡島を拠点に国際的な活動を行なっている太鼓芸能集団です。太鼓だけを演奏する集団だと思われがちですが、世界各地の楽器を取り入れたり、日本の伝統芸能を現代に再創造するなどし、新しい舞台表現を創り出すグループとして国内外で高い評価を得ています。今年で創立43年。世界50以上の国と地域で7000回以上公演を行っています。

鼓童の名の由来 心音を思わせる太鼓の音

「鼓童」の名は、人間にとって基本的なリズムである心臓の鼓動から音（おん）をとって名付けられました。体全体に響き渡る大太鼓の音が母親の胎内で聞いた最初の音（心音）を想起させるからです。大太鼓を聴きながら寝てしまった...という人もいらっしゃるかもしれませんが、それも納得なのです。また、「童（わらべ）」の文字には、子どものように何ものにもとられることなく無心に太鼓を叩いていきたいという願いが込められています。ぜひ、その音を劇場で体感してください。



幅広い年齢層で舞台に深みをもたらす

現在、正メンバー35名、準メンバーは2名（2024年9月）。年齢も幅広く21歳～73歳（平均年齢32.5歳）です。その内、鼓童創設期からの4名が名誉団員として活躍しています。時には73歳と21歳のメンバーが同じ舞台に立つことも。佐渡出身者はスタッフの4名のみで、大半が日本各地や海外から集まってきています。



鼓童十二月 特別公演2024 「山踏み」

2024年冬にお届けする鼓童の最新作は、韓国太鼓（チャンゴ）演奏家のチェ・ジェ Chol（崔在哲）氏をゲストに迎えた特別共演作品。チェ氏の提唱する「歩みの中から生まれてくるリズム」をともに探求し、創り上げるプロジェクト型の作品です。「身体性、音楽性、精神性」この三本の柱を足元から見つめ、新しくも奥深い、そして鼓童らしさを兼ね備えた舞台を、京都・春秋座でぜひ生で体感してください！

演出：住吉佑太
出演：太鼓芸能集団 鼓童、チェ・ジェ Chol（崔在哲）
鼓童出演者（予定）：
中込健太、小松崎正吾、住吉佑太、地代純、鶴見龍馬、北林玲央、木村佑太、平田裕貴、定成啓、中谷憧、新山萌、野仲純平

2024年 12月14日〈土〉13時開演
15日〈日〉13時開演

京都芸術劇場 春秋座

- ・特典付きプレミアム席...12,000円
- ・一般...6,500円
- ・京都芸術劇場友の会...6,000円
- ・学生&ユース...3,000円（100席限定）

京都芸術劇場チケットセンター〈窓口〉電話
TEL.075-791-8240（平日10時～17時）
主催：京都芸術大学 舞台芸術研究センター

佐渡島

鼓童村

鼓童の誕生と 佐渡での始まり

鼓童の前身である「佐渡の國 鬼太鼓座（おんでこぎ）」は、1971年に佐渡島で生まれました。放浪の旅の中で佐渡を訪れた田耕（てん・たがやす）氏が当時、若者離れが問題化していた佐渡島に日本の伝統芸能・工芸を学ぶ大学や職人村を造ろうと考えました。その資金集めとネットワーク作りのため、太鼓の演奏で世界を回ろうと作られたのが鬼太鼓座でした。

その座員を集めようと「おんでこ座夏期学校」を開催。当時、若者に人気だった放送作家で作詞家である永六輔氏のラジオ番組や雑誌『an・an』などで告知されると全国から30人余の若者が集まり、その中から田氏の呼びかけに応じた数名が鬼太鼓座の座員となりました（ソリストとして有名な林英哲氏も夏期学校への参加がきっかけで座員となり、鼓童の創設期まで中心的メンバーとして在籍しました）。

夏期学校の校長は民俗学者の宮本常一氏。小木民俗博物館の設立や、現在は佐渡の名産として知られる「おけぎ柿」の生産奨励などを通して離島の振興に力を注ぎました。鬼太鼓座にも大きな期待を寄せ、亡くなる1981年まで若者達を励まし続けました。

その後、映画製作を契機に鬼太鼓座の代表と座員の間で意見の対立が起き、田氏は鬼太鼓座の名前と共に佐渡から離れた。佐渡に残ったメンバーが無一物から新たな集団を立ち上げたのが「鼓童」です。「鼓童」とは、私達を生かしている自然のリズム「鼓動」そのままに、童のごとく、ひたむきに生きようという思いを込めた名前です（1981年・季刊『鼓童』創刊号より）。同時に設立した公演活動のマネジメントを行う会社は、日本海を往来し、物資とともに文化を運んだ北前船（きたまえぶね）にちなみ「株式会社北前船（きたまえせん）」と名付けました。

1981年、新生「鼓童」はベルリン芸術祭で石井眞木氏作曲のオーケストラとの共演曲『モノプリズム』を披露し、世界デビューを果たしました。

佐渡島で創造活動をするということ 世界を旅し、佐渡島の自然の中から生まれる音

鬼太鼓座時代を含めると創設から50年経ち、世代としては三代目に入りました。「地域とのつながりもより深くなり、地に足の付いた活動ができるようになってきました」と話す鼓童代表・船橋裕一郎さん。自然豊かな佐渡島は生活の場と自然との距離がとて近く、常に波の音、風の音、木の葉の音、鳥のさえずる声などが聞こえ、自然の音に対する感覚が研ぎ澄まされる地。鬼太鼓をはじめとした芸能も非常に盛んで多種多様。鼓童メンバーも各地の祭りに出向き、踊りを習ったりしています。

また、鼓童村は山の中にあるので、都会の防音スタジオで練習するのとは違い、音を気にすることなく、伸び伸びとした環境で音楽が創造されています。そういったのびやかな環境と島からの様々な刺激が、鼓童の演奏や舞台表現にも表れています。地域とのつながりがあり、さらに世界中を旅し、それらのふれあいの中で創作活動を行う。鼓童はそういった意味でも佐渡という環境に根差した、無二のグループなのです。

太鼓だけではありません！ ありとあらゆる楽器と 音楽要素を取り入れた舞台

鼓童の舞台は太鼓が主ですが、その他に様々な笛や踊り、唄、箏、三味線、鳴り物、西洋楽器（ティンパニ、スネアドラム等）や国内外の民族楽器、時には声も楽器として使われます。リズムやスタイルも日本の民俗芸能から採取したリズム、西洋や現代音楽から取り入れたものなど様々。ありとあらゆる音楽要素を取り入れながら、「鼓童の音楽」としてひとつの流れを構成しています。

曲はどうやって作るの？ あの演奏はどう合わせているの？

太鼓の演奏にも楽譜はあり、リズム譜が主。中には「ドンドンクドンドコドコ…」などと先輩から後輩へ口伝で受け継がれる口唱歌（くちしょうが）もあります。

曲は基本的に自分たちで作曲。旅先で出会ったメロディや佐渡の風景などからインスピレーションを受けて作曲することもあります。チャンスは平等にありますが、舞台上で採用されるかは実力次第。今回、上演する『ミチカケ』では若手による新曲が沢山盛り込まれています。

また、鼓童のメンバー以外に作曲を依頼することもあります。これまでに冨田勲氏（作曲家・シンセサイザー奏者）、石井眞木氏（作曲家・指揮者）、藤舎呂悦氏（邦楽囃子方）、池辺晋一郎氏（作曲家）など様々なジャンルの方から楽曲提供されています。



（左上）佐渡の國 鬼太鼓座ができて間もない1973年7月。中央に宮本常一氏と現在名誉団員の藤本吉利、右端が田耕氏。撮影：石塚邦博氏（左下）1996年。鬼太鼓座誕生以来の「ファン」を自称し、厳しい言葉で常に鼓童のあり方を見守った永六輔氏と鼓童メンバー。（右）1970年。おんでこ座夏期学校のひととき。永六輔氏と参加者。

（上）初秋の佐渡島。空と海の青、稲穂の黄色が美しい。（中）大勝神社に立つ、茅葺き露徳造りの能舞台（県の有形民俗文化財）。鏡板に日輪が描かれている。（下）研究所のある柿野浦集落の鬼太鼓

（左上）舞台では太鼓や笛だけでなく、中国の揚琴（ようきん）、オーケストラで使うグランカッサやティンパニなど様々な楽器が使われる。（左下）自然につつまれた鼓童の本拠地である、鼓童村の中庭。（右）稽古場でのリハーサル風景。